

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

著者	八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ
発行年	1990-08-16
URL	http://hdl.handle.net/10502/5663

第十章

マヤ文明の崩壊

マヤ文明の崩壊について、もう少し詳しく検討してみることにしよう。すでに指摘したように、マヤ文明の崩壊といっても、ここでいうのは、低地南部で栄えた文明の崩壊のことである。というのは、北部のユカタン地方では、引き続き、マヤ文明は栄えるからである。このことにまず注意しておきたい。

南部でも、ペテン・イツァ湖やヤシユハ湖の周辺からベリーズ北部にかけては、土地の放棄のあとはなく、人が住み続けた証拠がある。もともと、マヤ文明全盛時の社会と比べるべくもない、いかなければ村落レベルの生活が営まれていたにすぎない。こうした状況は、最近の住居址の研究でわかるようになったにすぎず、同じような証拠は、放棄されたとみられているその他の遺跡でも見つかかる可能性が高い。実際、コパン地域では、八五〇年頃、文明を支えてきたといってもよい中心部の支配者層が消滅したあと、周辺部では、一二五〇年頃まで人々が住み続けたことが、住居址の研究を主体とする発掘から明らかになっている。つまり、人々は、それぞれ住んでいた土地を放棄したとはいえなくなってきたのである。

しかし、マヤ文明が、八〇〇年から九〇〇年にかけて滅んだことは認めなくてはならない。人々がその後この地に住み続けたというものの、文明とは呼べないような、みすぼらしい生

活を送ったのであるから、文明社会の質に違いがおこったとみなくてはならない。さらにティカルでは最盛期の人口の一〇%ほどになったというし、コパンでは、そこまで極端ではないが、人口は半分ほどに減ったというのであるから、文明社会を支える人口、すなわち、量の問題も無視できない。質と量に極端な差がこの時期に生まれたといったほうがよいのである。

さらに、マヤ文明は忽然と滅んだという説が、いまでも多くの人に信じられているようであるが、実際には、八〇〇年頃から徐々に衰退していき、滅んだのである。こうしたことに、注意しながら、マヤ文明の崩壊について考えてみよう。

崩壊の証拠

崩壊の前兆としては、まず、石碑が刻まれなくなることが挙げられる。たとえば、ピエドラス・ネグラスでは七九五年、キリグアでは八一〇年というふうに、八〇〇年前後から、各地で石碑は建てられなくなる。中心部のティカルでは八六九年、ワシヤクトウンでは八八九年となり、最後の石碑を刻んだ年は遺跡によって差がある。最後の石碑は九〇九年を刻んでおり、百年あまりのうちに、石碑建立の習慣はとだえてしまった。

マヤ文明は忽然と滅んだのではないといったが、いま挙げたように、石碑が最後に建てられた年代をもとにしていても、百年以上の時間差を遺跡間にみることができるのである。決して忽然と滅んだのではないことがわかるであろう。

この石碑が最後に建てられた年代とそれぞれそれが建てられた遺跡の場所を合わせてみると、さらに興味深いことがわかる。崩壊は南西からはじまり、北東へ徐々に広がっていったとみられるのである。

石碑建立が途絶えるとともに、神殿や球戯場などの建物も建てられなくなる。また、多色の美しい土器もつくられなくなり、贅沢品も少なくなる。住居もほとんど建てられなくなった。人口が急激に減少したことをうかがわせる証拠で、たとえば、すでに触れたように、ティカルでは、五万人ほどいたといわれる全盛時の人口が一〇%に減ってしまったと考えられている。

つまり、九世紀から十世紀にかけて、伝統的なエリート層の生活様式がこわれてしまったのである。それらはどうしてわかったかというと、ティカルやワシヤクトウンの発掘で、ベンチの上に、石や壊れたアーチの残骸でおおった墓が発見されたり、擬似アーチや壁が壊れたのを修復せずに塞いだあとや、残骸の上にごみなどが発見されたり、床の上に墓がつくられている跡が発見されたからである。貴族層が住まなくなつて、空家となつた宮殿や住居を下層階級が占有したり、以前神聖視されていた場所に死体を埋めるようになったのである。さらに、宮殿や神殿の壁面に線刻画、つまりらくがきが描かれたり、石彫の人物の顔をそいだり、石彫類が破壊されたり、石碑が動かされたり、ひっくり返して建てられたりした。また、エリート層の墓から翡翠が略奪されたこともわかつた。

さらに、伝統的な貴族層が没落したことは、新しい技術と様式をもつた土器の出現によりわ

かる。土器も突然作られなくなったのではない。様式や質に衰退の傾向がみられ始めるとともに、違った様式の出現がおこった。つまり、多色の土器は作られなくなってきたが、それと呼応するかのように、胎土に異物の少ない精陶土器 (fine paste) と、型に入れられて作られ、模様、図柄が彫り刻まれた (carved-molded) 土器とに徐々に置きかわってくる。ティカルやワシヤクトウンやナクムなどでは、この型に入れて作られた土器は、宮殿や、時には神殿の床のみつかり、墓で発見されることはほとんどなかった。これは、新しく起こった、伝統的でない交易を示唆している。いわゆるテペウⅢ期の型入れ土器の質は、古典期の土器に比べて、劣っているとはいえない。マヤ文字を刻んだものもあるし、神々や人物を刻んだものもある。しかし、非マヤ的な四角な文字や、髭をはやした異国的な人物や、アトラトルやその他の異国的で軍事的なシンボルが登場してくる。そうした土器をみると、マヤ社会に変化が起こったことがわかるのである。

こうした土器を使用した人の時代は長くは続かなかつた。そしてついに放棄されてしまう。もはや建物の維持や修復ができなくなり、熱帯の植物が建物を覆い、擬似アーチをもつ建物も崩壊していった。広場のしつこい塗りの舗装が木や蔓でこわれるようになった。貯水システムも崩壊もおこった。乾季や貯水システムの崩壊による水不足のために、放棄があったに違いない。湖の周辺には人は引き続き住んでいたので、気候の変化がおこったように思われる。廃墟となった遺跡に時折巡礼したり、墓がつくられた。

崩壊の原因

こうした証拠を前にマヤ文明の崩壊の原因を探る仮説がいくつか提出されてきた。崩壊の原因は、自然的なものと、社会的、政治的、経済的なものに分けられると、第四章で述べた。自然的災害には、地震、ハリケーン、旱魃、土地の疲弊、雑草や虫の害、伝染病などの原因が考えられた。社会、政治的原因としては、人口の肥大、農民の反乱、都市間の争い、異民族の侵入、移動などが考えられてきた。

そこで、その一つ一つについて、これまでどのように考えられてきたかについて、もう少し詳しく述べていくことにしたい。

土地の浸食、疲弊

焼畑農業は本来的に土地を破壊してしまうものである。焼畑農業は、何年かトウモロコシを植えると、休まなければならぬ。人口が増えていくと、休耕の期間が短くなり、土地の栄養分が急速に衰え始め、ついには疲弊してしまうというわけである。

使いすてられた畑（ミルパ）は、深く根を張った草に覆われる。張った根は、焼畑では取り除くことはできない。それに、土を掘り起こし、草の根を除去する道具をマヤ人はもっていないので、食料経済の破綻が起こり、それがもとで、マヤ文明は崩壊したという意見もある。

また、マヤ文明の崩壊の原因を土地の浸食と疲弊に帰す意見もある。マヤの大部分の農地は丘の斜面であり、農業の拡大は木々の伐採を促進し、土地は浸食される。丘は裸になり、生産力がなくなる。表土は流れ、湖を埋め、季節的な池 (Aguada:baio) になる。そこでは蚊が発生し、疫病が蔓延する。

こうした意見が代表的であるが、実際には、土を掘り起こす道具が出土しているので、土地の改良ができたはずであるし、ティカルの近くの調査から、バホにおける土の堆積は非常にゆっくりしていることが判明し、集約農業による大量の表土の流失は否定されている。

一九三三年から一九四〇年にかけて、畑を焼いてトウモロコシの種を植えて、収穫量を計る実験が行なわれたが、それによると、二年目は、最初の年の収穫量の約二〇%が減るだけであったが、三年目になると、初年度の半分に収穫量が落ちることがわかった。これはユカタン半島北部のチチェン・イツアの近くで行なわれた実験によるデータで、問題の低地南部のものではないので、事情は異なるかもしれない。しかし低地南部でも、これに近いことが起こることはまちがいないだろう。ユカタンでは、二年以上同じ畑にトウモロコシの種を植えず、三年目には新しい畑に種を植える。そして使っていた畑は、十年は放置しておくという。それは広大な土地があるということである。もつとも最近の研究によると、マヤ人は焼畑農業に頼っていたのではないということが強調されるようになってきたが、人口が増えると、かなり食料の問題が深刻化することはまちがいない。

早魃

農業ができなくなるほどの気候の激変がおこり、いままでの土地をすて、新天地に移り住んだという意見もある。早魃はマヤ人を周期的に悩ましたに違いない。これまで、湖の沈殿物や花粉分析からは、気候の急激な変化は認められてこなかった。動物（ジャガー、猿、オウム、ワニなど）や植物（ロゲウッドやチユーンインガムの原料ともなる汁を出すチコサポテなど）の考古学的な遺物も、現在存在する動植物となんらかわらないことから、気候の急激な変化があったという仮説は否定されてきた。

たとえ早魃が湖や川のない地域での放棄の原因と考えられたとしても、湖や川の近くにあるコバーやコパンなども放棄されており、早魃説で、マヤ文明の崩壊をすべて説明することはできない。

ところが、最近の調査から、大きな気候変化があったと主張されるようになってきた。

チチェン・イツアの貿易の拠点とみられている、イスラ・セリットという島の発掘から、形成期のものは、現在の海水位から平均で六〇センチほど低いところで発見された。形成期後期は、今より海水位は低かったと考えられるのである。しかしそれ以後古典期前期にかけて海水位はふたたび上昇した。海水位の上下は、氷河の形成や解氷と関係している。氷河が発達すると、海水位は下がるし、寒冷化する。逆に氷河が減退すると、氷が解けるので、当然海水位は

上がる。このことから、気候の変化があつたことを考えなくてはならなくなつたのである。水河の移動に基づく過去の気候の変化は、つぎのようになると推定されている。

紀元前一四〇〇～紀元前五〇〇年	寒冷期
紀元前五〇〇～紀元後六〇〇年	温暖期（最適気候期）
六〇〇年～九〇〇年	寒冷期
九〇〇年～一二五〇年	温暖期
一二五〇年～一五五〇年	寒冷期

寒冷期には、海水位が低下し、北メキシコでは乾燥気候になるのに対し、南メキシコでは雨が多くなり、湿潤な気候となる。これに対し、温暖期では逆の現象が起こり、南メキシコでは、雨が少なく、乾燥した気候となるという。

マヤ文明がもっとも栄えた時代は、六〇〇年から九〇〇年の古典期後期といわれる時代であるが、気候的には、寒冷期にあたる。マヤ文明の栄えたペテン地方は、雨のよく降る湿潤な環境にあつたとみられる。その気候の変化により、すなわち、寒冷期から温暖期に移ると時期を同じくして、マヤ古典期文明は滅んでいる。これをみると、気候と文明の盛衰が密接に関係していると思わざるをえない。

これとは別に、形成期の末期に、ミラドールをはじめとする、ペテン北部の諸都市があいついで崩壊したのは、気候の変化による乾燥化が大きな要因であると主張する意見が提出されたが、同じように、古典期の崩壊も気候の変化による乾燥化が大きな原因のように思われるのである。

昆虫の害

昆虫の害がマヤ文明の崩壊の原因だとする意見もある。たしかに、イナゴが食物を食いつくしたということが過去にあり、それが飢餓の原因の一つになることは確かであるが、害虫がどのような害をもたらしたかを考古学的に知るすべはいまのところない。

ところがこれも最近の研究からであるが、トウモロコシに被害を与えるウイルスがあつたらしいといわれるようになった。トウモロコシのモザイク・ウイルスは、マヤ文明の崩壊の少し前、西インド諸島からバツタ (*Peregrinus maidis*) によってマヤ地域にもたらされたというのである。もしそうなら、基礎食物であるトウモロコシが甚大なる被害を受ける。それが崩壊の一原因になった可能性は否定できない。

古典期にマヤ人のトウモロコシへの依存度が減ることについては、すでに述べたが、これと関係しているのかもしれないし、またこれは、気候の寒冷化と関係しているのかもしれない。

疫病

疫病による崩壊説はこれまであまり真剣に研究されてこなかった。しかしティカルの発掘は、鼠や蚊、蠅などの人間に害になる病気を運ぶものが繁殖していたことを教えてくれている。赤痢や黄熱病、マラリアや梅毒なども、当時すであつたのかもしれない。栄養不良は病気に罹りやすくする。病氣、旱魃、戦争などは、組織の緩んだ社会に大きな打撃をあたえたに違いない。

地震

グアテマラとの国境に近いベリーズのシュナントゥニツチでは、少なくとも一つの大きな宮殿様の建物が地震で被害を受けたとされている。そこで、遺跡全体も地震で崩壊し、それが、その地を放棄する原因となつたという説を唱える人がいる。そして、この地方的な出来事は、マヤ地域全体にも適用されるのではないかとした。

この九世紀におこつたという地震で、擬似アーチをもつ建物が壊れており、それらを修復することをせず、以後放棄したというのは確かかもしれないが、それがマヤ地域全体に適用できるわけではない。それにティカルなどでは、その地を放棄せざるをえないほどの大地震のあとをみることはできないのである。

地震というものは周期的におきるものであるから、どの地震のときに建物が崩れたのかをみつけることはたいへんむずかしい。また、建物の崩壊が、地震でおきたのか、放棄後の構造上の欠陥または弱さによっておきたのか、それを区別することなど至難の技である。というわけで、この説に賛成するわけにはいかない。

ハリケーン

この地方でもう一つ大きな災害をおこすものに、ハリケーンがある。ハリケーンもこの地方をよく襲うのであるが、それによって、マヤ地域全体で、しかも一〇〇年あまりにわたる衰亡を、これのせいにするのもむずかしいのではないだろうか。

都市間の競いあい

以前の研究では平和なマヤ社会であったという意見が大勢をしめていたが、最近では、交易や農業生産において、古典期後期には、都市間の競いあいが生じたという意見が有力になってきた。実際、碑や壁画には、戦いの場面や捕虜を足蹴にした図が好んで描かれており、都市間の闘争はかなり激しかったと思われる。

商業的な競いあい

マヤの都市は、翡翠やケツアル鳥の羽などの贅沢品ばかりか、塩やメタテ、マノや黒曜石などの必要物資を長距離交易によって手にいれていた。貝や塩や魚はカリブ海や川沿いの地域から得ていた。メタテやマノと呼ばれる挽き臼や棒はマヤ山脈やグアテマラ高地から、黒曜石はグアテマラ高地から得ていた。翡翠はモタグア川中流域から地方にもたらされた。そうした物資は、都市の数が少ない間は問題なく手にはいつてきたと思われる。しかし、古典期後期に新しく都市が勃興してくると、これまでの交易網は影響を受けざるを得なかったと考えられる。

さらに西側から異民族が侵入したらしいことが、考古学的に確かになってきた。西のタバスコあたりにいたチヨントル人は、十六世紀頃には、海の民として知られ、海上交易に従事していたことが文献からわかっている。そうした状況を九、十世紀に無批判に適用することはつしまなければならぬが、西側の異民族は、新しい交易網をもたらしただけに違いない。すなわち陸上、河川交易から、海上交易にかわつたらしいのである。従来の交易網がすたれてしまったことは容易に推測できる。つまり、社会に必要なものが手にはいりにくくなったことで、社会不安や都市の力の低下がおこったと思われるのである。

人口肥大

アルタル・デ・サクリフィシオスやルバントゥン、セイバル、ティカルなどで発掘された農民層の骨から、栄養不良が確かめられた。これは作物の不作や人口増大によるものと考えられ

る。墓から発掘されたエリート層の骨はいずれもしっかりしており、十分な栄養を取っていたことがわかった。

ティカルの中央アクロポリスは、広場を囲んで宮殿と考えられている建物が建てられているが、その広場への入口が間に合わせの壁で閉じられていることがわかった。これはプライバシーや安全の確保のためと思われる。これなども人口増大による変更と考えられている。

農民層の反乱

人口の肥大、栄養不良、飢え、労働条件の悪さ、制度の厳しさなどから、農民層の反乱がおこったという意見も、マヤ文明の崩壊の原因の一つに考えられる。

異民族の侵略

西側の各地では、建築や彫刻に非マヤ的要素がみられるが、それとともに、ファイン・ペイストとよばれる薄手の混りものの少ない精陶土器が出現することについては、先ほど述べた。それは特にアルタル・デ・サクリフィシオスやセイバルで著しい。タバスコ州やベラクルス州にかけての湾岸地帯は、メキシコ系民族が住んでいた地域であり、そうしたファイン・ペイスト土器をもった人々により西側の諸センターは滅ぼされたのかもしれない。

しかし異民族の侵入がマヤ文明全体の崩壊の原因とはならない。たとえば、ティカルでも異

民族が侵入し、石碑の人物の顔をそいだり、碑をひっくりかえしたりしているが、そのまえにすでにティカルは衰退を始めており、八三〇年以降にはもう大建築は建てられなくなる。石碑も八六九年を最後としている。八世紀には五万から七万ほどの人がいたとされているが、その九〇%がいなくなってしまう。

人々の移動の仮説

九世紀に南部低地の諸都市は放棄され、人々は北部の新天地に移ったという意見もある。しかし北部は、形成期から人々が生活していたし、考古学的にみても、九世紀に突然ペテン様式が北部で繁栄したという証拠はない。逆に、資源の枯渇や人口問題などの内部的問題から、ペテンのほうに拡大した証拠がある。また、南部のグアテマラやチアパス高地に人々は新天地を求めて移動したという意見もある。これも土器から裏づけることができない意見である。結局、人口の移動という説は受け入れられない。

マヤ文明の崩壊の原因について諸説を検討してきたが、どれをとってもマヤ文明の崩壊をうまく説明できるものはないように思われる。

このようにみると、滅亡の原因はそれほど単純ではないことがわかってくる。この章の最初に述べたように、低地南部は、トポシュテやタヤサルからベリーズにかけて、少なからず活動のあとをみることができ、低地南部がすべて放棄されたという説は否定しなければならな

なくなってきた。その一帯を除くと、放棄されたように思われるが、これも調査が進むと、規模は小さいが、人々が住み続けた証拠が見つかるかもしれない。おそらく全体的に共通する原因とともに、地域ごとに少しずつ違った原因により滅んだに違いないが、ここでもう一つの仮説をだしてみよう。

短期暦と文明の興亡

古典期の前期とか後期という時代をみると、ほぼ二五〇年から三〇〇年で終わっている。これはメソアメリカで栄えたモンテ・アルバンやアステカなどの諸文明についてもいえる。さらに唐や江戸時代なども、だいたい三〇〇年前後で終わっている。これにはなにかあるのではないだろうか。人が生まれ、成長し、死ぬように、文明も生まれ、栄え、そして衰えるのではないだろうか。人が七〇〇八〇年で死ぬように、文明の一つの興亡の期間が約三〇〇年というのではないだろうか。

ここでたいへん興味深いことがある。マヤの暦のうち、短期暦と称しているものは、約二六〇年を一周期にしている。そしてマヤ人は二六〇年を一つの周期として、歴史は繰り返すと考えていたことは、第一章で述べたとおりである。つまり、歴史の法則というものを、マヤ人は知っていたのではないかと思うのである。

八アハウ・カトゥン（七世紀の終わり頃）九・一二・〇・〇・〇
六月十六日） 八アハウ八ウオ（六九二年

チチエン・イツアは放棄された

八アハウ・カトゥン（十世紀中頃） 一〇・六・〇・〇・〇
年六月二十二日） 八アハウ八ヤシュ（九四八

チャカンブトゥンは棄てられた

八アハウ・カトゥン（十二世紀の終わり頃）一〇・一九・〇・〇・〇
四年九月二十八日） 八アハウ八クムク（一二〇

フナック・ケエルの陰謀により、イツア族はチチエン・イツアを放棄した

八アハウ・カトゥン（十五世紀中頃） 一一・二二・〇・〇・〇
年一月四日） 八アハウ三モル（二四六一

マヤパンは破壊され、棄てられた

約二六〇年で繰り返される八アハウ・カトゥンの二〇年間は、いずれも放棄や滅亡の年と記されていた。歴史は繰り返すのである。

一六一八年にフェンサリィダとオルビータがペテンのイツア族を征服に行った時、イツア族の王カネックは、「我等の神を崇拜することをやめる時と神官達が予言した時は来たっていない

い、なぜなら、今、時はオシユアハウ (Oxitan) であるからだ」といって、キリスト教を受け入れることを拒否した。オシユアハウとは三アハウのことである。これをマヤの長期暦に直すと、一二・一・〇・〇・〇 三アハウ 一八カヤツプ (西暦一六三八年六月七日) となる。イツア族が征服されたのは、それから八〇年あまりあとの、一六九七年三月十三日である。運命の八アハウ・カトゥンが始まるわずか四カ月ほど前のことであつた。

つまり、マヤ人は文明の盛衰を身をもって知り、それを書き残したばかりでなく、歴史の伝えてきたとおりの運命に従つたのではないだろうか。文明の二六〇年周期説というのは、マヤの予言説といつてもいいかもしれない。

さきに気候の変化を述べたところで記した時代区分は、マヤ文明の区分とほぼ同じであつた。マヤ文明の盛衰と気候の変化に密接な関係があることを疑いえないような資料である。その期間は、また大体マヤの短期暦と一致していることも、不思議といへば、不思議である。

マヤ人は、いろいろ周期の異なる暦を使つていたが、それらをいちいち天体や自然現象と関係づけている。たとえば、金星の運行に関しては、『ドレステン絵文書』に、金星の五周期が三六五日暦の八周期 (五八四×五 \equiv 三六五×八) に当たることが記されているし、二六〇日暦とも結びつけられている。また、マヤ人は、この世界を四つの方角に分割しているが、それを二六〇日暦と関係づけている。四つに分けられた二六〇日暦の二〇の日のなかで、アクバル、ラマツト、ベン、エツナツプの四つの日は、後の時代には、カン、ムルック、イシユ、カワツク

となるが、それぞれ一年の最初の日に当たり、それらの日の名は、一年を表わすために使われることもあった。このように、時間、空間が暦と密接に関係づけられていたのである。

マヤ人は、当然、文明の盛衰の周期と暦の関係に気づいたにちがいない。暦と自然の現象の一致の不思議さというべきか、見事な調和というべきか、それに気づいたマヤ人は、それをいち早く自分たちの思想に反映させたのではないだろうか。そしてそれが後世に伝えられ、イツァ王がそれに縛られるほど、強力な予言として形成されていったのではないだろうか。

ここでマヤ人が用いていた短期暦を利用して、私達の生きている時代をちよつと考えてみよう。その始まりをどこにおくかで、いろいろな意見がでてくるとは思うが、そのはじめを明治においてみよう。そうすると、現代は明治のはじめから約一二〇年である。マヤの二六〇年文明周期説にもとづくとき、いまはいちばん栄えている時代といえることができる。波のうねりにたとえると、一番高いところにある時代とみることができる。だから戦争で負けても、このように繁栄をすぐむかえることができたのではないだろうか。戦争が下り坂にさしかかっている時におこっていたら、日本はなかったかもしれない。

マヤ予言説に従うと、今世紀は日本の時代だといっている。我々がいる時代は繁栄を謳歌する時代といっているのではないだろうか。二十世紀の末になると、おそらく世紀末の思想がはびこるのではないかと思うが、マヤの周期説を信じるかぎり、そのようなことは気にする必要はないのである。

さて、マヤ文明の崩壊の原因を、最後に考えてみよう。

私は、文明というものは、波のように盛衰を繰り返すかえすと考えるのであるが、同時に、各時代時代において許容量というものがあろうと思う。マヤ人というのは、道具としては石器しか知らず、輸送手段も人力しかもたなかったのであるから、マヤ人社会の許容量というものは限られていたのではないだろうか。マヤ人は古典期後期にそれをオーバーしてしまったのではなからうか。

許容量には、植物生産量に規定された人口はもちろん、世界認識や想像力などの知識体系なども含んでみたい。ひとつ人口の許容量についての具体的な資料を挙げてみよう。

コパンの最盛期の七〇〇年〜八五〇年の中心部の推定人口一六、八一六〜二一、〇二〇人に対し、食料生産に規定された許容推定人口は、九、三〇七人である。大幅に人口超過で、中心部の生産量では、生きていけない。周辺部のセセスミル、サンタ・リタ、エル・ハラル、リオ・アマリイリヨ、それに山の斜面の耕作地からとれる食料を足してやっと、コパン地域の人口が維持できる生産量であった。ほんの少しの生産量の低下で、社会が混乱するほど、許される最大の人口に達していたのである。

トウモロコシに依存した生活、それで支えられる人口というものは限られている。最近農業生産に関する研究が進んで、マヤ人はトウモロコシだけに依存していたのではない、その生産も焼畑農業だけではない、ということがわかってきたが、主生産はトウモロコシであることは

まちがいなく、古典期後期の後半には、集約農業によっても養える人口の極限に達していたのである。乱開発ということばがあるが、開発しすぎると、人間の生活に支障がでてくることは、最近の生活を考えても、いろいろ思い当たることがありそうである。

マヤ人は、複雑な曆を用いていたし、複雑な神々や儀式の体系を作りあげていた。文字を使い、歴史を記していた。そうしたものを次の世代に伝えてこそ、文化は維持される。そうした知識においても、もう受け継ぐことができなほど極限に達していたのかもしれない。

こうしたことを記すのも、たとえば、いま我々が当たり前のように使っているさまざまな文明利器に対して、同じように、受け継ぐことができなほど、膨大な知識が集積していると感じるからである。たとえば、コンピュータなどはいいい例である。一人の力ではもうどうしようもないほど複雑になっている。次の世代のものが、勉強しても追いつかないほど、発達しているのではないかと危惧している。コンピュータは社会生活に深く浸透してしまっているので、その知識の伝達がうまくいかないと、社会そのものまで破綻するのではないかと、心配になるのである。

知識の伝達といえば、我々は、学んだお蔭で、奈良時代や平安時代のことを知っているが、現代のマヤ人は、自分たちの過去であるマヤ文明のことを何ひとつ知らない。いかに知識の伝達のための制度が大切か、私はマヤ人たちとの生活で教えられたのである。これは古典期時代に応用できる。文明の中心にあった支配者層が、文明を維持する知識の伝達に失敗すると、ひ

とたまりもなく崩壊するように思われるのである。特にマヤの支配者層は、血縁関係にある一握りの家族と推定されるので、その弱さは、ちようど、血族支配の会社が三代以上続くのはまれといった例とよく似ているのではないだろうか。

文明の盛衰が二〇〇〇三〇〇年で起こるとするのは、いろいろな文明の歴史をみれば、納得いきそうである。しかし、そうした文明が減びる必然性は歴史からは読み取れない。滅びるといふことは、端的に言うと、文明を担ってきた人々が消滅することである。マヤにおいても、考古学の調査から、全盛時の九〇%の人口の喪失が確認されている。文明を担った人々がほかに移動した証拠は見つからないのであるから、その人たちは滅んでしまったとしか考えられない。だが、人々はその後も生き続けた証拠がいろいろな場所から見つかっている。明らかにその人たちは、文明を担ってきた支配者とは階層の違う人であり、文明の形成のためには、あらためて、組織力や政治力等、特別な知識が必要であるかがわかるのである。

最近といっても、もう二〇年以上もたつが、崩壊の原因は単一ではなく、いくつかの原因が複合してマヤ文明は滅んだという説が好まれるようになってきた。たしかに、単一の原因ではなく、いくつかの原因が複雑に作用して、マヤ文明の崩壊はおこったという説の方がうまく説明できる。

おそらく八〇〇年を過ぎる頃から、天候に異変が起こり始めた。ペテン一帯は乾燥化し始め、農産物の不作が続いた。それまで、限界ともいえるほど人口が増え、繁栄していた社会に、そ

れは大きな打撃となった。そこに害虫による農作物の被害が重なったのかもしれない。

人口の肥大による資源の減少、トウモロコシの不作による栄養不良は、考古学的にも確かめられている。体力の低下は生産層の活力を弱めたばかりでなく、病気などに対する抵抗力を低下させたであろう。社会の沈滞のひとつの引き金になったに違いない。

あるいは社会の沈滞の方が先におこったのかもしれない。組織というものは安定期にはいると沈滞するものである。成長期から安定期にはいり、やがて沈滞期を迎える。今の場合、文明というよりも、社会といったほうがよいかもしれないが、その周期というのは二〇〇〜三〇〇年くらいだと考えられる。沈滞し始めた時代に都市間の争いや生産の不調、疫病などがおこると、弱り目にたたり目といおうか、その社会は急激に衰退に向かうと考えてよいのではないだろうか。

社会の停滞、支配力の低下に対して、支配者は、公共物の建造をこころみる。公共物は、支配力が最高のときより、むしろ政治的問題が起こったときや社会が不安定なときに、建てられる。それは歴史の教えるところであるが、マヤでも確かめられる。だがそれは支配の強化にはならず、弱った社会への最後の打撃となる。マヤ文明が突然滅びたように思えるほど、建築活動、記念碑の建立停止などが起こったのは、それが原因のように思われる。

しかしこうした推測を証明することができるであろうか。さらにもう少し考えると、我々はなぜマヤ文明は滅んだのか、と問うてきたが、実はどのように滅んだのかを考えてきたにすぎ

ないのである。衰えていくプロセス、過程を考えてきたにすぎない。衰えることが不可避の事実であったとしても、減じる必然性がないことは、日本の歴史を振り返れば、すぐさま納得いく。

減び去った事実がある。その理由がいくつか考えられる。しかしそれを証明することができらるであろうか。証明はタイムマシンにでものもつて、その時代に行ってみる以外にはないのではないだろうか。それが不可能であるからには、崩壊の原因をさぐることはできても、答えをだすことはできはしない。答えをだしたと思っても、その答えは証明されないものである。ここでこの答えとは納得できる「ことば」にすぎない。いかに言えば人々が納得するかという、型式を採すということである。ここに自然科学における答えとの大きな違いがある。たとえば、ロケットが月にとべば、そのために考え、仮定し、そして計算したことすべてが、そのことで証明されるのである。

われわれは証明できないことを考えてきたのである。それは一面ではむなしいかもしれない。しかし見方をかえれば、誰もが、それぞれの答えをもちうるということである。いちどあなたも考えてみてはいかがでしょうか。